

## 一九世紀中葉における播磨の在村肥料商の動向 ー 播州神東郡藪田村高瀬屋の場合ー

著者	白川部 達夫
著者別名	Tatsuo SHIRAKAWABE
雑誌名	東洋大学人間科学総合研究所紀要
巻	22
ページ	232(027) - 219(040)
発行年	2020-03
URL	<a href="http://doi.org/10.34428/00012025">http://doi.org/10.34428/00012025</a>



# 一九世紀中葉における播磨の在村肥料商の動向

——播州神東郡藪田村高瀬屋の場合——

白川部 達夫\*

## はじめに

近世後期の播磨平野では木綿の作付けが盛んとなり、木綿織も姫路藩の専売制の下で姫路木綿として知られるようになった。これにともない魚肥を中心とした肥料も需要が高まったと考えられる。こうしたなかで播磨平野西端にあり、古くから良港として知られた室津に対して、姫路の外港であった飾万津が、平野の中央に位置する有利さから、次第に干鰯・鯡粕の荷揚げ港として成長した。その様相についてはかつて飾万の有力魚問屋兼干鰯商であった嶋屋仁右衛門家を中心に検討したことがある。嶋屋は飾万の干鰯会所や室津を中心に、兵庫・高砂などから魚肥を仕入れ、播磨平野の広い範囲にこれを販売していたことを明らかにした。<sup>①</sup>

本稿は、これに続いて、播磨国神東郡藪田村の在村肥料商高瀬屋の場合を検討したい。<sup>②</sup> 藪田村は、姫路の東を流れる市川の東岸にあり、市川を通じて魚肥を運送・販売するのに便利な場所にあった。高瀬屋は、藪田村の庄屋を代々勤めた家で、近世初期か

らの古文書が残されている。同家に残された肥料商関係の史料は仕入れを記録した買入帳と若干の関連史料で、それも明治期が中心であるが、これにより幕末より明治期の市場変動の一端はうかがうことができる。以下、この点について検討したい。

## 一 肥料商売の開始

高瀬屋がいつから肥料商売を開始したかは、はっきりした史料がないが、文政期には姫路の干鰯屋仲間に参加していたよう<sup>③</sup>で、つぎのような仲間定が残されている。

定

一、近年干鰯売口猥二相成候二付、此度仲買一統申合万事正路二売買可致候事、

一、入船物之儀は問屋より仲買え不洩様相触立合之上、直組可致候事、

一、粕類売口別て猥二相聞え以来は浜相場二准し売捌、不正之粕類決て取扱申間敷候事、

一、鯉之儀格別少利成物ニ有之候処、是また近年売口高下相見え以来は、浜相場ニ准シ、現銀売は壹匁内外、見当りニて、随分相働正路ニ売捌可申事、

一、惣体肥代現銀ニ相定売買可仕候、尤代銀延銀ニ相成候ハ、相對之上、壹ヶ月壹歩之利足相掛取引可申事、

一、此度仲間中戎講取結正・五・九月毎年三度宛、於室津参会仕、万事不埒之筋合并不正之売買不致候様申談候事、尤講銀三匁つ、会席え御持参、若不参之衆中有之候ハ、其間屋より持参可被致候事、附、自然右申合之趣、相背候衆中有之候ハ、早速其所之年番之者迄被相達候得て、則年番之者より室津集會之節、一統致沙汰、其上何ニ不寄市立買口共差留メ可申候事、

右、定書之趣、堅相守可申為其承知印形相廻し候、仍て如件、

文政四年巳二月

姫路  
干鰯  
仲買中 ⑨

これは文政四年（一八二二）二月に姫路の干鰯仲買中が近年干鰯の売り口が乱れたので、正路の売買を仲間で申し合わせたものである。

第一条では、正路の売買の申し合わせ、第二条では、入船物は問屋より仲買へ漏れないように触れた上で立ち会い取引を行うことを確認している。また第三条目では粕類の売買がことに乱れているので、浜相場に準じて売りさばき、不正の粕類は決して取り扱わないこと、第四条目では鯉は格別利が薄いのに、売り口に高

下があるので現銀売りは浜相場に準じて、銀一匁内外の見当で売りさばくことを決めている。第五条目では、肥代は現銀売買で、延銀の場合は一カ月一分の利子で取引することとしている。第六条目は、干鰯仲買仲間の組織の規定で、仲間は戎講を結んで正・五・九月に室津で参会して申談を行うこととして、その時、講銀を銀三匁を徴収すること、不正のものがあれば年番に申し出て、室津参会の時に、一統で沙汰して、市立買口を差し止めるとしている。

姫路の干鰯仲買仲間は室津に入荷する干鰯を扱う仲買として戎講をこの年結成したことがわかる。室津の干鰯問屋は、姫路藩から冥加銀一三〇両を課されており、その代償として干鰯市場を独占的に開いていた<sup>4)</sup>。そこで藩内の姫路干鰯仲買仲間はこのもとで取引を行ってきたのである。しかし一九世紀になると飾万が次第に成長しており、文政六年（一八二三）には、室津は飾万を相手取って市立での禁止を求めて訴訟を起こし、以後、天保一〇年（一八三九）、弘化四年（一八四七）と訴訟が続いた。

姫路の干鰯仲買仲間が近年干鰯の売り口が乱れているといつて定を作成したのは、室津を中心とした干鰯流通の乱れが背景にあったと考えられる。

仲買仲間の商売では、粕類の売買がことに乱れているので、浜相場に準じ、不正の粕類は扱わないとしている。浜相場の対象となる粕は、メ粕や鯉粕と考えられるが、その価格の変動にばらつきがあることや不正のものがあることが問題となっていた。鯉粕では現銀では浜値段に銀一匁内外の差額とすると調整されている

が、何に対して銀一匁なのかははっきりしない。また現銀取引が基本とされ、延銀の場合は月一分の利子とされていた。年利に直すと一割二分で、飾万の嶋屋仁左衛門家でも同様であったので、播磨では少なくとも一九世紀に入るとこの利子率が広く行われていたことがうかがえる。

さらに高瀬屋には文政一三年（一八三〇）のつぎのような文書が残されている。<sup>⑤</sup>

#### 一札之事

一、此度我々干鰯商売仕候ニ付、取引之儀相頼申候所実正也、通名前儀藪田村平兵衛ニ相極取引可被成候、万一残銀ニ相成候ハ、六貫目迄印形之者より相弁可申候、若又印形之内差支有之候ハ、残り壹人ニても、急度皆済可仕候、尤此一札幾年ニても其俣御用ひ可被成候、為後日之一札、仍て如件、

文政十三年 藪田村 平兵衛 印

寅五月 同村 平三郎 印

同村 利兵衛 印

#### 吉田屋与兵衛殿

この一札は、藪田村平兵衛・平三郎・利兵衛が吉田屋与兵衛と干鰯商売の契約を結んだものである。吉田屋与兵衛は明治三年（一八七〇）五月、兵庫の干鰯屋仲間『戎講印形帳』に湊町の干鰯屋として名前が見える。<sup>⑥</sup> また藪田村平兵衛は、高瀬屋の当主であっ

た。

これによれば兵庫との干鰯商売は署名者三人で行い、その名義人は平兵衛とすること、もし残銀が出た場合、銀六貫匁までは三人で支払う、差し支えても一人でも返済するとしている。ここでの干鰯商売とは、兵庫の干鰯屋から前貸しで品物を送って貰い、三人で消費者である農民に販売し、その代銀を回収して支払うという委託販売であったようである。農民からの代銀回収が滞れば、銀六貫匁までは三人が負担するというのもそのためであろう。その実態はわからないが、高瀬屋は文政末年には、室津・飾万だけでなく、兵庫の干鰯屋との委託販売契約を結ぶようになっていたことが指摘できる。また兵庫の干鰯屋吉田屋は播磨東部の在村の有力者に魚肥販売を委託することで、その販路拡大を図っていたといえる。この結果については、わからないが、明治期になると高瀬屋は兵庫（神戸）の干鰯問屋との結びつきを強めていった。

## 二 幕末期の魚肥仕入れ動向

幕末期の高瀬屋の干鰯仕入れについては、嘉永元年（一八四八）の「買入帳」と平兵衛・清兵衛宛の送り状などが残っている。以下、これらを検討して、幕末期の高瀬屋の魚肥仕入れの状況を明らかにしたい。

嘉永元年（一八四八）の「買入帳」は、同年六月から翌年九月までの高瀬屋の仕入れ全般をまとめた記録である。<sup>⑦</sup> 表1にその状

況を整理した。これによればこの年は室津の干鰯問屋嶋屋半四郎からの仕入れが中心で、代金総額の八九パーセント余に及んだ<sup>(8)</sup>。残りは飾万の嶋屋仁左衛門、兵庫佐比江新地の京屋吉右衛門から仕入れていた<sup>(9)</sup>。品目は羽鯿が中心で、三人の仕入れ先いずれでも一番を占めた。総額は銀五貫七九八匁九分で、仕入れ総額の五〇パーセント余となった。羽鯿は、鯿の身を削いだ頭と骨の部分の

表 1 嘉永元年の高瀬屋の仕入

居所	名前	品目	重量 (貫)	代銀 (匁)	10貫目の価格 (匁)
室津	嶋屋半四郎	鯿粕	786	2316	29.46
		羽鯿	1937	5026	25.94
		外わり鯿	565	1506	26.67
		五島	251	810	32.26
		白子	178	632	35.44
	小計		3718	10291	27.68
飾万	嶋屋仁左衛門	鯿粕	22	53	24.4
		羽鯿	116	278	23.9
		走水粕	13	40	30
	小計		151	370	24.51
兵庫	京屋吉右衛門	羽鯿	208	495	23.85
		五島取	122	379	31.05
	小計		330	874	26.52
合計			4199	11536	27.47

出典：嘉永元年「買入帳」高馬家文書 1002 番

もので、鯿粕などと比べると安価なものであった。続いて鯿粕が二〇・五パーセントとなった。外割鯿は、鯿を背開きにして干したものであるが、身を欠くものもいので、羽鯿とはほぼ同等のものであったと考えられる。五島は長崎五島列島の鰯であるが、重量表記があることと、価格が高く設定されているので、粕とと思われる。走水粕も関東の三浦半島走水に集荷された粕と考えられる。五島取も五島産鰯の油を取ったもので、粕であった。

以上、嘉永期の高瀬屋の魚肥仕入れは、室津からの仕入れの比重が極めて高く、これに補足的に飾万・兵庫からの仕入れが行われていたことがわかる。もちろん毎年仕入れ先は変動するので、この年だけで、室津の圧倒的優位を強調することには慎重でなければならぬ。これを補う意味もあり、以下、断片的ながら残された取引史料から、それぞれの状況を検討してみたい。その際に、手がかりとなるのが当主名である。高瀬屋は当主は古くから平兵衛・清兵衛を称することが多かった。当該期では、天保初年まで平兵衛、遅くとも天保十二年（一八四一）には清兵衛が代替わりし、以後明治三〇年代まで、清兵衛が当主となっている。これによりおよそその年代比定が可能で、以下はそれにしたがっている。

a 室津との取引

室津では、嶋屋半四郎からの仕入れの外に、畑平六・綿屋長兵衛などと取引があった。

畑については送り状が残っている<sup>(10)</sup>。

覚

羽にしん 五十九

十八貫

廿七匁五分

同 廿九 廿八匁

地引取 十五

十貫

三十四匁

メ

右之通ニ御ざ候、以上、

二月二日

畑平六

菽田村平兵衛殿

羽鯉七十九と地引取拾五俵を送ったことが確認できる。地引取は地元産の鰯メ粕であろうか。また明治三年（一八七〇）のものであるが、綿屋長兵衛との取引記録がある。<sup>⑪</sup> 明治三年一〇月から四年一二月にかけて、高瀬屋は綿屋から鯉粕重量一四九八貫目余と羽鯉重量一二九一目貫余を購入している。鯉粕では、嘉永元年（一八四八）の嶋屋半四郎が高瀬屋に販売した二倍程度、羽鯉では六四六貫目少ないものであった。明治三年（一八七〇）の綿屋からの仕入れは、嘉永元年（一八四八）の嶋屋半四郎からの仕入れとあまり変わらない量で、羽鯉より鯉粕に比重が傾いていた。この文書の冒頭で取引の様相を見ておこう。

室津綿屋

長兵衛殿

午閏十月廿七日  
一、ル々モツヘイ粕 式拾本

此メ六百三拾九貫二

内、八貫目

筆引

メ六百三拾匁貫二

九四正ミ

五百九拾三貫三百廿八匁

永式百三十五匁かへ

代金百三拾九両壹歩式朱

永五百七十文

これによれば、ルルモツヘイ粕二〇本の重量が六三九貫二〇〇目で、ここから筆引として、八貫目が引かれ、その九四パーセントが正味重量とされている。俵引きなどがないので、その分が一括六パーセント引かれている。この引きは、時には「九一」となることもあり、ものによって変化したようである。正味重量一〇貫目に永三三五匁を掛けて、代金が計算された。明治初年には銀貨が暴落し、取引が混乱したため、永一〇〇〇匁Ⅱ金一両として計算することが行われた。それでこういう表記になったのである。最後に支払記事があるが、午閏一〇月には三回に分けて銀一一三貫一〇〇匁が支払われ、一月にも五回に分けて支払いを行い、以後一二月三回、翌明治四年正月二回、二月一回、三月一回、六月五回となっている。その都度、こまめに支払いが行われたことがわかる。

ところで高瀬屋は、高瀬屋喜兵衛というものを仲介して室津から魚肥を手に入れていたようで、これを示す覚がある。<sup>⑫</sup>

覚

御会所出

一、羽鯉四拾丸也

右之通御受取可被下候、昨日積送りきひなこ廿六俵二壺俵不足二相成候様被仰聞承知仕候、右壺俵先方より不足にて参り居り候間、御会所へ其由御申出し可被下候、一寸御返事可申上候、

午四月六日

高瀬屋

木兵衛

藪田村

平兵衛様

ここでは室津の会所出の羽鯉を高瀬屋喜兵衛が藪田村の平兵衛に送ったことを知らせた上、平兵衛から「きびなご」を送って貰った時に、俵数が不足しているという指摘を受けて、その処理を連絡している。ほかにも数通積み送り状があり、運送の役割をもっていたようである。高瀬屋を称しているのも、何らかの関係があったものと思われる。同様に、清兵衛代には田中屋伊八が運送にかかわっていた。<sup>13)</sup>

送り状

一、ルタモツヘイ三拾本

(嶋屋半四郎)  
嶋半出

右之通積入申候間、改御受取被下候、以上、

田中屋

巳三月十六日

伊八

高瀬屋清兵衛殿

この送り状は、室津の嶋屋半四郎の鯉柏を送ったもので、田中屋

の送り状は、兵庫についても残っている。

b 飾万との取引

飾万では嶋屋仁左衛門との取引が中心である。つぎの史料は嶋屋の送り状で、この時は馬背で飾万から藪田村へ羽鯉を送ったことがわかる。<sup>14)</sup>

「(封上書)  
藪田村

嶋屋仁左衛門

平兵衛様

覚

一、羽鯉 拾丸

三拾七貫四

□八馬

三十七貫八

惣次郎馬

三十七貫六

万助馬

三十七貫六

平蔵馬

メ

右之通御座候、以上、

羽鯉一〇丸を四人の馬方に分けて送っている。外には、通帳では船の記述があるので、通常は船で送ったと考えられる。嘉永四年(二八五二)の通帳では、一月から五月にかけて、干鰯・佐伯粕・羽鯉・佐伯取を購入している。その代銀総額は銀二貫五六七匁余で、それほど多くはなかった。この通帳では冒頭に、前年の未払い分の記載とその請求が行われているが、前貸しの利子として「月八り」と書かれており、月利八厘、年利九・六パーセントだったことがわかる。この点、つぎの嶋屋が出した請求書でも確認できる。<sup>15)</sup>

覚

申より戌七月ノ残

一、銀百四拾六匁九分三厘

干加代

利七匁

正月より  
六月迄

ノハ百五拾三匁九分三厘

戌より寅大晦日ノ残

一、同式百廿五匁四分

利十匁八分  
正月より  
六月迄

ノハ同式百三拾六匁式分

卯七月

嶋屋仁左衛門

藪田高瀬屋

清兵衛殿

ここでは、申より戌七月までの残銀にたいし六ヶ月で銀七匁の利子を請求しているが、ほぼ八厘にあたるのがわかる。後者の利一〇匁八分でも同様で、嶋屋が在村小売商に魚肥を前貸した場合の利子は月八厘で、文政四年（一八二二）の姫路干鯛仲買仲間の定より、利子率が低下していたことがわかる。嶋屋は幕末期の農民への小売りが滞った場合、月一分の利子を付けて返済することを訴えているが、小売商相手では、月八厘と低い利子で対応していたといえる。<sup>16)</sup>

嶋屋は、飾万へ入る魚肥を仕入れるなり、委託を受けるなりして、高瀬屋へ販売していた。しかし高瀬屋の依頼を受けて、兵庫から魚肥を仕入れて送ることもあったようである。つぎの史料は

それを示すものである。<sup>17)</sup>

〔封上書・表〕

藪田村

嶋屋

高瀬屋清兵衛様

仁左衛門

〔封上書・裏〕

未正月十日

鮮取十本

覚

一、マシケ鮮取 拾本

廿七貫四

廿六貫二

廿七貫四

廿七貫四

廿七貫二

廿六貫二

廿七貫

廿五貫二

廿貫四

廿七貫

ノ式百六拾七貫四

内四貫目

筆引

又拾三貫百七拾匁

十五引

ノ正ミ 式百五十貫式百三十匁  
壹貫百七拾七匁三分三厘

又拾壹匁七分七厘

兵庫上懸り壹歩

又四匁

兵庫入用

又銀札六匁六分七厘

廻り船ちん

代銀六匁五分五厘

ノ銀壹貫式百目六分五厘

右之通、御改請取可被下候

未正月十日



ここでは、マシケ鯰粕一〇本を兵庫で買い付け、これを高瀬屋に送ったことがわかるが、兵庫の上懸かり、入用、廻船賃を高瀬屋に請求している。「代銀六匁五分五厘」は、廻り船賃が銀札で支払われたので、現銀に換算したものと考えられる。これらの合計が銀一貫二〇〇目六分五厘となっているが、実際計算すると表記より銀一匁多くなっている。

通常は嶋屋は飾万からの運送費を請求するが、ここでは兵庫からの購入手続き代銀と運賃などを含めて請求している。この点では、嶋屋の責任で買い付けたものを送ったのではなく、高瀬屋の求めに応じて兵庫で買い付け、これを高瀬屋に送ったものと見られる。こうした委託買い付けの形式もあったようである。

#### c 兵庫との取引

高瀬屋は文政四年（一八二一）から兵庫の干鰯屋と取引していたことは述べたが、外にも送り状などでその状況がわかる。<sup>⑮</sup>

送り状

〔網印省略〕印

一、鯰粕拾本

（瓜屋半兵衛）  
瓜半出

三百貫八

替舟賃壹駄付拾六匁也、御渡し

右之通、積入申候間、改御受取可被下候、以上、

四月七日

田中屋伊八

藪田村

高瀬屋清兵衛様

この送り状は、兵庫湊町の干鰯屋で明治三年（一八七〇）には

仲間の年行司を務めた瓜屋半兵衛から鯰粕一〇本を送るにあたって、田中屋伊八が出した送り状である。<sup>⑯</sup> 田中屋伊八は運送にあたった廻船問屋であると考えられるが詳細は不明である。外に田中屋伊八出しの運賃の覚があり、なかには兵庫新町の瓜屋宗兵衛・①出しの記事がある。<sup>⑰</sup> その冒頭を紹介するとつぎのようである。<sup>⑱</sup>

覚

一、鯰粕拾五本

瓜半出

四百六十六貫弐

弐〇

一、貳百拾八匁壹分

高七ちん

十二月廿一日

内百五十六匁弐分五厘

金弐歩

受ヶ取

メ六拾壹匁八分五厘

不

（中略）

メ壹貫百三拾八匁五分五厘

戌一月

田中屋伊八

藪田

高馬清兵衛様

ここでは瓜屋半兵衛の鯰粕一五本を送ったこと、その重量と高瀬船の代銀と請取状況などが報告されている。また末尾には運賃の総額が示され、その後、追加分が記載されている。田中屋伊八は、兵庫の干鰯屋瓜屋半兵衛が飾万津の嶋屋仁左衛門へ鯰粕三〇

本を送った送り状に「田中屋伊八船積入送り状」とあり、同人の船を使ったことがわかる。兵庫から飾万・室津辺りの廻船にあたったものであった。<sup>(22)</sup>

### 三 明治中期以降の高瀬屋の仕入れ

明治一八年(一八八五)以降、明治三〇年(一八九七)までの仕入れ動向を表2-1に示した。嘉永期と比較して、羽鯉がわずかになり、鯉粕・大豆粕が中心となっていたこと、神戸(兵庫)の肥料商からの買い付けが次第に主流になっていったことが明らかである。

明治一八年(一八八五)は、神戸の肥料商山本伊佐と石川茂兵衛からの仕入れが中心となった。またこの年はすべて鯉粕の仕入れだった。山本伊佐は明治四年(一八七一)の仲間連印帳では、神戸「木戸町 和泉屋伊佐、代判和泉屋弥兵衛」とあり近世から続く肥料商であった。また石川茂兵衛も同帳で「江川町 住屋藻兵衛」とある。<sup>(23)</sup> また明治四四年(一九一一)の時事新報社調査の「全国五拾万円以上資産家表」にも米穀・肥料商として名前がある有力肥料商であった。<sup>(24)</sup> 山本伊佐とは明治二五年(一八九二)まで取引があり、石川茂兵衛とは明治三〇年(一八九七)まで取引が続いている。坪田浅五郎については不明である。

明治二四年(一八九二)では、山本伊佐・石川茂兵衛の外に、神戸では有馬市太郎との取引があった。有馬市太郎は、明治一四年(一八八一)の営業人名簿に「川崎町 有馬市太郎」とあり、<sup>(25)</sup>

明治四年(一八七一)では「川崎町 柴屋市太郎」とある神戸の肥料商である。<sup>(27)</sup>

また播盛社・飾洋社・伊藤支店・中村支店・谷村又蔵など姫路周辺(飾万・室津・網干・高砂などを含む、以下姫路周辺とはその意味で使うことにする)のものからの仕入れも行われていた。播盛社・飾洋社については、社名から播磨地域の肥料商が作った商社であることが想像できる。谷村又蔵は、明治三一年(一八九八)の「日本全国商工人名録」では姫路市相生町在住の米穀商兼肥料商として出てくる。<sup>(28)</sup> 浜野又次郎は「日本全国商工人名録」に姫路野里寺町の肥料商で屋号は菊屋と称したとある。<sup>(29)</sup>

伊藤支店は、帳簿の肩書きに姫路と飾磨とあり、二カ所にあった。右近支店は、越前河野の北前船主右近家の支店と考えられるが、支店が神戸なのか、姫路周辺にあるのか所在を明記していないのでわからない。坪田浅五郎・久住合名会社・岡上彦五郎などは所在が不明であるが、取引は一時的で規模も小さかった。

品目の推移については表2-2にまとめたが、明治二四年(一八九二)から大豆粕が仕入れられるようになり、明治二五年(一八九二)には重量で鯉粕を超えるようになる。大豆粕は当時の「満州」からの輸入が中心であったが、これについて『兵庫米穀肥料市場沿革誌』ではつぎのように述べている。<sup>(30)</sup>

彼の大豆粕輸入の当時の如きは此肥料の効能如何につきては、農家は大に躊躇の気味なりしも本県(兵庫県：筆者)に於ては播州揖保郡に於て始めて使用せるを嚆矢として、終に紀州淡州尾州三州地方に盛んに仕向けたるもの

の仕入れ動向

明治 27 年			明治 28 年			明治 29 年			明治 30 年		
品目	重量 (貫)	代金 (円)	品目	重量 (貫)	代金 (円)	品目	重量 (貫)	代金 (円)	品目	重量 (貫)	代金 (円)
鯉粕	6359	1575	鯉粕	5825	1481	鯉粕	4128	1225	鯉粕	4220	1398
羽鯉	60	12	羽鯉	94	25	羽鯉	27	8	羽鯉	134	39
大豆粕	6962	807	大豆粕	6984	816	大豆粕	14226	1834	大豆粕	8499	1180
鯉粕	2704	694	鯉粕	2038	526						
羽鯉	271	66	羽鯉	20	5						
大豆粕	1192	162	大豆粕	124	17						
			鯉粕	799	198				鯉粕	987	320
			羽鯉	60	14						
羽鯉	70	17	鯉粕	1282	308	鯉粕	212	71	大豆粕	30 枚	36
大豆粕	215	24				大豆粕	106 枚	181			
			鯉粕	1094	256				鯉粕	112	36

と述べており、年代の表記がないが、播磨では西部の揖保郡が最初に導入したことがわかる。大豆粕の輸入は明治初年で神戸では明治四年（一八七二）に中国人商人がもたらし、藤井又兵衛・石川茂兵衛が買い受けて、淡路方面に販売したが、試験的なもの

だったという<sup>(31)</sup>。その後、明治二〇年代になって、鯉粕の高騰を背景に、安価な大豆粕の普及が本格化したとされる。高瀬屋の記録は播磨東部の大豆粕利用を示すものである。  
なお明治三〇年以降の記述については、記載が仕入れの全体を示すか明確でないもので、表に示すことはしなかった。明治三一〜三三年（一八九八〜一九〇〇）については神戸の石川茂兵衛からの仕入れ<sup>(32)</sup>、同三四年（一九〇一）は飾万の中村支店、明治三五年（一九〇二）は、中村支店と松田三一（所在不明）からの仕入れが記載されている<sup>(33)</sup>。その都度、神戸と飾万から肥料を仕入れていたことがわかる。また明治三四年（一九〇一）にはトーマスリン酸の仕入れがあり、化学肥料を使い始めていたことがわかる。

最後に、表 2-3 に近代の神戸市場と姫路地域の仕入れ価格の違いを比較した。鯉粕ではその差はあまり大きいものではなかったが、神戸が大体、姫路・飾万より安価であった。神戸には鯉粕が多く集荷され価格も安くできたことがわかる。もちろん神戸から仕入れた場合、運送費がかかるので、これを考えながら仕入れが行われたであろう。時には姫路・飾万地域が安い年があるが、その場合は、高瀬屋の仕入れは姫路・飾

明治 30 年	
重量 (貫)	金額 (円)
5207	1717
134	39
8499	1216

いので、重量

表2-1 明治中期の高瀬屋

居所	名前	明治18年			明治24年			明治25年			明治26年		
		品目	重量 (貫)	代金 (円)	品目	重量 (貫)	代金 (円)	品目	重量 (貫)	代金 (円)	品目	重量 (貫)	代金 (円)
神戸	山本伊佐 (弥兵衛)	鯰粕	8062	1128	鯰粕	5287	1108	鯰粕	916	210			
					大豆粕	487	56	羽鯰	19	4			
	石川茂兵衛	鯰粕	2027	285	鯰粕	1392	300	鯰粕	1117	257	鯰粕	3056	751
								大豆粕	6185	595	大豆粕	7974	909
	有馬市太郎				鯰粕	427	91						
姫路地域	播盛社				鯰粕	295	61	鯰粕	3038	719	鯰粕	779	1660
					大豆粕	1027	104	羽鯰	97	21	羽鯰	21	5
	飾洋社				羽鯰	53	20						
	伊藤支店				鯰粕	2	15	鯰粕	334	84	鯰粕	749	189
					大豆粕	207	20	羽鯰			羽鯰	280	67
											大豆粕	927	106
											メ粕		103
	中村支店												
	浜野又次郎												
	谷村又蔵 (又三郎)				鯰粕	554	124	鯰粕	2244	532	鯰粕	1378	338
					大豆粕	1373	143	羽鯰	37	8	羽鯰	121	26
								大豆粕	2766	278	大豆粕	1669	188
不明	坪田浅五郎	鯰粕	270	41									
	右近支店				鯰粕	1489	320						
					羽鯰	189	40						
	久住合名会社 岡上彦五郎				灰		1						

出典：各年度の「買入帳」高馬家文書1004、1005-1~9番。

表2-2 明治期の高瀬屋の仕入品目

品目	明治18年		明治24年		明治25年		明治26年		明治27年		明治28年		明治29年	
	重量 (貫)	金額 (円)	重量 (貫)	金額 (円)	重量 (貫)	金額 (円)	重量 (貫)	金額 (円)	重量 (貫)	金額 (円)	重量 (貫)	金額 (円)	重量 (貫)	金額 (円)
鯰粕	10360	1455	9446	2018	7649	1802	5961	2028	9063	2269	11037	2770	4340	3058
羽鯰			243	59	152	32	422	98	402	95	173	44	27	8
大豆粕			3094	324	8951	873	9848	1125	8369	993	7109	833	14226	2015
メ粕								103						

出典：表2に同じ。明治29年には大豆粕106枚、明治30年には大豆粕20枚が購入されたが、重量記載がないには含まれていない。ただし金額にはその代金分が含まれている。

表2-3 明治中期の神戸と姫路地域の肥料の価格比較（10貫目当たりの価格：円）

品目	場所	明治18年	明治24年	明治25年	明治26年	明治27年	明治28年	明治29年	明治30年
鯰粕	神戸	1.40	2.11	2.30	2.46	2.48	2.54	2.97	3.31
	姫路地域		2.34	2.38	2.52	2.57	2.50	3.37	3.24
大豆粕	神戸		1.16	0.96	1.14	1.16	1.16	1.29	1.39
	姫路地域		1.03	1.01	1.13	1.32	1.40		

出典：表2と同じ。

万を中心としていた。鯰粕については、この時期、神戸市場の影響力が高瀬屋がある市川周辺に及んでいたことがいえるであろう。また大豆粕については、神戸は鯰粕ほど安定して安価な商品を提供できたわけではなく、姫路・飾万地域からの購入が多く行われることも見られた。

### まとめ

以上、播州平野東部の在村肥料商の幕末期より明治三〇年頃までの魚肥の仕入れ状況を紹介した。

敷田村高瀬屋は、名主を勤める家柄で、一八二〇年代頃には肥料商を営むようになったと考えられ、文政四年（一八二一）の姫路干鰯仲間の定が残されている。また文政一三年（一八三〇）には、兵庫の肥料商吉田屋与兵衛と委託販売契約を結んで肥料を販売した。

高瀬屋に残る仕入れ帳は、近世は嘉永元年分一冊であるが、これでは室津の嶋屋半四郎からの仕入れがほとんどで、これに飾万の嶋屋仁左衛門、兵庫の京屋吉右衛門からの仕入れが若干あった。仕入れ先は毎年、変動するので室津の肥料商の優位をこれだけで判断はできないが、影響力が大きかったことはわかる。ほかに仕切などでは室津の畑平六・綿屋長兵衛などから仕入れていた。仕入れた魚肥では、羽鯰が多かったのも特徴である。飾万では嶋屋仁左衛門との取引が中心で、兵庫は吉田屋与兵衛のほか、京屋吉右衛門・瓜屋半兵衛・宗兵衛などから仕入れていた。また飾万

の嶋屋仁左衛門から高瀬屋への魚肥の前貸しは、嘉永四年（一八五一）には月八厘で、姫路の仲買仲間の定や嶋屋の小売りの月一分より安かった。

明治中期になると、神戸では山本伊佐と石川茂兵衛からの仕入れが中心で、地元では姫路の谷村又蔵や播盛社や飾磨の中村支店や伊藤支店などが並行して仕入れ先となった。商社や中村・伊藤支店の所在や状況がわからないので、確定できないが、室津との取引は確認できなくなった。魚肥は羽鯰はわずかになり、鯰粕が中心となった。また大豆粕が鯰粕に並んでいた。また神戸と姫路地域の鯰粕の価格を比較すると、差はあまり大きくないものの大体神戸の方が安く、その影響力が及ぶ理由がわかる。大豆粕については、鯰粕ほどではなく、姫路・飾万地域が安い時が多かった。それぞれ流通の違いによるのであろう。

### 注

- (1) 拙稿「幕末期における干鰯仲買と地域市場」（『東洋大学人間科学総合研究所紀要』一〇号、二〇〇九年）。
- (2) 本史料は、兵庫県姫路市豊富町御蔭の高馬良裕家文書による。同家文書目録は姫路市史編集専門委員会事務局市史編集室編『姫路市史編集資料目録』一三、二三、四二、五八（姫路市、一九八三年、一九八五年、一九九三年、二〇〇九年）に高馬弘家文書として収録されている。本論の出典注はこの目録番号による。なお番号は、通し番号になっている。
- (3) 高馬弘家文書一〇〇一番。
- (4) 拙稿「幕末期における干鰯仲買と地域市場」（前掲）。以下、飾万津

については同論文による。なお地名は近世は飾万津、明治一六年に飾磨津と称している。ここでは近世が中心なので、飾万と記すことにした。

- (5) 高馬弘家文書七二七番。
- (6) 神戸市立博物館所管・明治三年五月「戎講印形帳」。
- (7) 高馬弘家文書一〇〇二番。
- (8) 嶋屋半四郎、嶋屋仁左衛門については、拙稿「幕末期における干鰯仲買と地域市場」(前掲)。
- (9) 神戸市立博物館所管・明治三年五月「戎講印形帳」。
- (10) 高馬弘家文書七一五番。(本文書は綴り文書で多くの内容を含む)。
- (11) 高馬弘家文書一〇二二番。
- (12) 高馬弘家文書七一五番。
- (13) 高馬弘家文書一〇一五番。
- (14) 高馬弘家文書七一五番。
- (15) 高馬弘家文書一〇二四番。
- (16) 拙稿「幕末期における干鰯仲買と地域市場」(前掲)。
- (17) 高馬弘家文書一〇二四番。
- (18) 高馬弘家文書一〇一五番。
- (19) 神戸市立博物館所管・明治三年五月「戎講印形帳」。
- (20) 高馬弘家文書一〇一六番。
- (21) 神戸市立博物館所管・明治三年五月「戎講印形帳」。
- (22) 姫路市史編集専門委員会編『姫路市史』一一巻下、史料編、近世3(姫路市、一九九九年)二二二頁。
- (23) 神戸市立博物館所管・明治四年正月「兵庫津干鰯中買仲間組合名前帳」。
- (24) 同前。
- (25) 「全国五拾万円以上資産家表」(時事新報社調査、一九一一年、渋谷

隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成』IV、柏書房、一九八四年所収)。

- (26) 神戸市立博物館所管・明治一四年「営業人名簿」。
- (27) 神戸市立博物館所管・明治四年正月「兵庫津干鰯中買仲間組合名前帳」。
- (28) 「日本全国商工人名録」(渋谷隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成』II柏書房、一九八四年所収)。
- (29) 同前。
- (30) 『兵庫米穀肥料市場沿革誌』(兵庫米穀肥料市場、一九一一年)九一頁。
- (31) 坂口誠「近代日本の大豆粕市場」(『立教経済学研究』57巻2号、二〇〇三年)。
- (32) 高馬弘家文書一〇〇五―八番
- (33) 高馬弘家文書一〇〇五―九番

## 追記

本論文は二〇一七―二〇一九年文部科学省科学研究費補助「近世後期の市場変動と肥料商」(課題番号一七K〇三一〇八)の成果の一部である。論文作成にあたっては、快く古文書の閲覧を許された高馬良裕氏および協力いただいた姫路市史編集室・神戸市立博物館の皆様の御協力をえた。記して深謝の意を表す次第です。

\* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学文学部

## 【Abstract】

## Rural fertilizer dealer in Harima Province in mid-19th century Japan

Tatsuo SHIRAKAWABE\*

This paper examined how Takaseya, a farmer in Harima province, started to purchase fish fertilizer in the mid-19th century. Takaseya started a fertilizer business in the 1820s, joined brokerage in Himeji, and traded with fertilizer brokers in Hyogo. The book of 1848 showed that Takaseya had purchased from the Murotsu area, which is also in Hyogo prefecture. However, after 1886, this company began purchasing from Kobe and Himeji and Shikama. This paper reveals how this company started to use a type of small herring known as *Nishinnkasu* and soybean lees for fertilizer.

**Key words** : fertilizer dealers, *nishinnkasu* (鯉粕), soybean lees, Shikama port, Hyogo port

播磨の農村肥料商高瀬屋の19世紀中葉の魚肥仕入れを検討した。高瀬屋は1820年代に肥料商を開始し、姫路の仲買仲間に参加し、兵庫の肥料商とも取引をしていた。1848年の帳簿では室津を中心に羽鯉や鯉粕を仕入れていた。しかし1886年以降になると、兵庫と姫路・飾万などから仕入れるようになった。肥料も鯉粕・大豆粕に変わっていったことがわかった。

キーワード：肥料商、鯉粕、大豆粕、飾万港、兵庫（神戸）港

---

\* A professor in the Faculty of Literature, and a research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University